

1920—30 年代農村社会における高等女学校の成立と展開 (1) —愛知県安城高等女学校における「教養教育」と「農業教育」

岡田洋司

(愛知学泉大学コミュニティ政策学部)

はじめに

高等女学校は、近代日本においての基本的な女子中等教育機関であった。高等女学校は義務教育ではなく、ここへ進学するためにはさまざまな条件をクリアしなければならなかった。その前提としては、そもそも通学範囲に高等女学校が存在することが必要であった。

以上、きわめて当たり前のことを述べたのは、近代日本において若い女性が高等女学校に進学し、学修するという行為は、その女性と家族だけではなく、社会的にさまざまな条件が揃うことが必要であり、決して当たり前のことではないということであらためて確認するためである。

そうした高等女学校であるが、高等女学校規程(1895 年)・高等女学校令(1899 年)によって法的にも整備され、明治中期に東京・大阪等の大都市、また県庁所在地を中心に普及した¹。

その後も高等女学校は、増加の一途をたどり第一次世界大戦中から戦後にかけて(1920 年代)に県庁所在地以外の地方都市や農村部へも広がっていくことになった。それは、換言すれば、地方都市や農村部でも高等女学校教育＝女子中等教育を受容するための条件がある程度、整ったということであり、そのことは戦前期の女子教育を考える場合、また女性のあり方を考える場合(さらにいえば、地域社会のあり方を考える場合)、相当に大きな意味をもっているといえよう。

高等女学校についての研究には、かなり多くの蓄積がある。とくに近年は、従来からあった制度史検討を前提にして、良妻賢母教育にとどまらな

い高等女学校の教科・教育内容、制服(洋服化)の問題、植民地での高等女学校のあり方等さまざまなかたちで論点が提起されている。

そうした中で、天野郁夫・高木雅史・梅村佳代等の各氏が地域社会と高等女学校とのかかわりを問題にしている²。前述のように高等女学校の設立は、地域自体がその設立についての条件をもっていることが前提であり、地域社会と高等女学校との関連を問うことは女子教育のあり方を考える上でも、地域社会のあり方を考える上でもきわめて重要である。現在のところ、こうした視角からの研究は点数もきわめて限られている。また資料的な条件もあり、論点自体も一定の方向に収斂されているとはいえないが、その提起している意味は大きく、本稿もこれらの研究を前提として、問題を深めていきたい。

その場合、筆者は、前述のように、とくに地方都市や農村部でも高等女学校が一般化したということに大きな意味を見出すものであり、本稿では、1921(大正 10)年に愛知県碧海郡安城町(現安城市)で設立された県立の(最初、町立)安城高等女学校の例を検討する。

1920 年代において地方都市や農村部においても高等女学校が成立したということは、地方都市や農村部でも高等女学校を設立するための条件が形成されたということであるが、当然、そうした条件の形成はスムーズにおこなわれたわけではないし、成立した高等女学校自体、そうした条件のあり方に規定され、さまざまな問題、場合によっては存続の危機さえ抱えていた。

安城高等女学校は創立後数年のあいだに「一、教養ある婦人たれ」「二、よく働く婦人たれ」³という二つの教育方針を確立し、その方針にそって教育をおこなった。この教育方針は、この学校の存立条件、つまり地域社会とのかかわりによって規定されて成立したものであったが、現実には、この教育方針の実践にはさまざまな問題がともない、かつ揺れがあった。そこで本稿では、この女学校の二つの教育方針がどのようなかたちで実践され、かつどのような問題を孕んでいたかということを取り口に、1920年代から30年代における高等女学校と地域社会、とくに農村社会とのかかわりを考えたい。なお本稿では必要に応じ、碧海郡内のもう一つの高等女学校である刈谷高等女学校や安城町内のもう一つ的女子中等教育機関である私立安城女子職業学校にも言及する。

註

- 1) 高等女学校の全体像については、桑原三二『高等女学校の成立 高等女学校小史—明治編』（高山書店、1982年）、高等女学校研究会『高等女学校の研究 制度的沿革と設立過程』（大空社、1994年）等がある。
- 2) 天野郁夫編『学歴主義の社会史—丹波篠山にみる近代教育と生活世界—』（有信堂、1991年）、高木雅史「1920年代における地域社会の女子中等教育機関設立要求—町立刈谷高等女学校の設立と県立移管をめぐって」（『福岡大学人文論叢』第28巻、1997年3月）、梅村佳代「1900年代初頭の地域における高等女学校の成立と展開 四日市市立高等女学校を例として」（『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』第50巻第1号、2001年）等。
- 3) 北野〔喜祥〕校長「校訓」（愛知県安城高等女学校同窓会『会報』第15号、1926年7月）1頁。

I. 安城高等女学校の設立

1. 前提—第一次世界大戦期における安城地域の女子教育の状況

愛知県（立）安城高等女学校（現在、県立安城高等学校）は、愛知県碧海郡安城町にある。碧海郡は、1920年代以降、「日本^{デンマーク} 抹」として全国に知られた農業地帯であり、安城町はその中心であった¹。

同町は1906（明治39）年に碧海郡安城村・福釜村・箕輪村等が合併して成立した「町」である。町の中心には東海道線が走り、安城駅を中心に市街地＝町場が展開しているが、大部分は農村である。一応、地方都市といえるが、それ以上に農村としての性格を色濃くもっている町である。

そして、この町では、1921（大正10）年4月に、本稿で分析の対象とする安城高等女学校が、まず町立のかたちで設立されたのであった²。

愛知県では、高等女学校規程・高等女学校令が整備された時期に名古屋市立高等女学校（1896年）・愛知県立高等女学校（1903年）の名古屋市内の高等女学校をはじめ、豊橋・岡崎・半田・犬山・新城の各市・町に市立・町立等の高等女学校が設立された。また私立としては愛知淑徳高等女学校（1905年）が設立された³。

さらに、第一次世界大戦期から戦後にかけて、一宮・津島・西尾・国府等にも高等女学校が設置された。この安城高等女学校も、そうした高等女学校設立の、いわば二順目の流れの中で設立されたものであった。

『愛知県安城高等女学校概覧』（1923年）はこの学校の設立の経緯を次のように述べている。

本校所在地安城ハ碧海郡ノ中枢ニシテ郡衙ノ所在地タリ。交通至便人情醇厚風俗亦質素ニシテ、町民ハ進取ノ氣ニ富ミ、一致協力能ク各種ノ事業ヲ企画シ町ノ繁栄発展ノ為ニ努力シ近時ノ進歩特ニ著シキモノアリ。カ

ク各方面ニ進展スルニ当リ教育ノ必要ヲ切実ニ自覚シ子女ヲシテ中等教育ヲ受ケシムルモノ、数モ亦年次激増ヲ見ルニ至レリ。特ニ女子ノ為ニハ近距離通学ヲ必要トスルニモ係ハラズ、従来稍遠隔ノ地ニ通学セシメザルヲ得ザル事情ニアリテ町民ノ不便ヲ感ズルコト一方ナラズ。疾クニ高等女学校ノ必要ヲ認め居リシト雖モ事業多端ノ為照稍々遷延セシモ時勢ノ進運ト世界大戦後ノ経営トニ益々教育振興ノ必要ヲ痛感セシメ教育機関増設ノ等閑ニ附スベカラザルニ至ラシメタリ⁴。

この『概覧』は、「各方面ニ進展スルニ当リ教育ノ必要ヲ切実ニ自覚シ子女ヲシテ中等教育ヲ受ケシムルモノ、数モ亦年次激増ヲ見ルニ至レリ」と述べている。これについては、データに乏しいが、「激増」というのは誇張と思われる⁵。しかし女子の教育をめぐる状況は徐々に変化していたこと自体は事実であろう。

それは、たとえば女子を対象とする実業補習学校が安城の各小学校へ設置されたことに表れている。とくに、安城町では、実業補習学校が、最初は男子ではなく、女子を対象とするものとして設立されたことは、この場合、大きな意味をもつことになる。

1917（大正6）年12月の町会で町当局は、それまで高等小学校に併設されていた女子補習科を廃止して女子実業補習学校を設置するという議案を提出した⁶。その内容は、それまで安城第一尋常高等小学校（大字安城）に付設されていた女子補習科を廃止し、女子を対象とする実業補習学校（農業補習学校）として改組・拡大しようというものであった。その結果、1918（大正7）年4月には、町内の第一から第五の五つの尋常小学校に、それぞれ女子実業補習学校が併設された。（さらに、翌年6月には男子の補習学校も設置され、安城町立

実業補習学校となった⁷。

この町立実業補習学校の女子部は、男子部が夜間であるのに対し、昼間に授業をおこなうものであった。科目としては、修身・国語・算術・農業・家事・裁縫であった（表1）。

表1 安城町立実業補習学校（女子部）
の科目と授業時間（単位：時間）

修身 （実践道徳の程度） 1学年48時間（以下同じ）、2学年48、3学年24
国語 （日常必須ノ文字、普通文ノ読方、書方、綴方） 1学年144、2学年96、3学年72
算術 （四則、少数、分数、比例、歩合算及珠算） 1学年96、2学年72、3学年48
農業 （農業大意） 1学年48、2学年48、3学年48
家事 （家事ノ大意） 1学年48、2学年72、3学年72
裁縫 （通常衣服ノ縫方、裁縫、繕方） 1学年480、2学年528、3学年600

注：「安城町立実業補習学校 時間割表」（『大正五年五月以降 学務ニ関スル諸表綴』安城町行政文書）

この実業補習学校は、農業補習学校として意図されており、農業関係の科目にはかなりの時間が割かれている。それが前提である。

しかし、それ以上に農業以外の科目が重視されていたことに注目したい。農業関係の科目が基本的には年間48時間であったのに対し、第一に修身・国語・数学といった一般科目が、それ以上に重視されている（少なくとも授業時間数では）。第二には、裁縫・家事、とくに裁縫が重視されていることも大きな特色である。裁縫・家事の時間数は、年間合計で528時間から672時間におよぶ（こうした時間数は、女子部が昼間に授業をおこなうため実現可能なことであった）。

そもそこの学校は、「〔女子の一引用者〕大多数ハ維新前ヨリ行ハル、地方ノ針師匠ニ就キ裁縫ヲ修ムルニ止リ時代ノ進運ニ併ハズ且精神ノ修養ハ勿論既習学力ノ保持ニ対シ殆ンド放任ノ観アリ」⁸という状況への対応として町会に提案されたのであり、授業時間を見る限りでは、この資料の

中でいわれる「既習学力ノ保持」をおこなうものとして、あるいは、裁縫塾の機能や家庭の躰けを、より“近代的”なかたちで効率的におこなうものとして意図されていたように思われる。

また、女子の補習学校への入学者は、男子が自小作層から自作層が中心であったのに較べて自作層から小地主層が中心であり、階層が高いことが大きな特徴である⁹。

以上を総合し、推測を交えながら、やや強引に結論づけると次のようなことになる。第一は、第一次世界大戦期の安城地域においては、農村の中間層から上層にかけての層に農業教育と家庭教育（裁縫に代表される）を通し“家庭”を担うための資質向上への要求が存在していたということである。それは、将来的には、農家の“嫁”（おそらくは階層的に上位に移動することを意図した）になるためのものであった。第二は、そうした要求をとりあえず、いわば手近な農業補習学校が吸収していたということである。そして、こうした状況の延長線上に、より高い教育内容と高いステイタスをもつ高等女学校への期待があったのではなかろうか。

2. 町立安城高等女学校の設置と県への移管

1920（大正9）年12月31日、安城町長神谷高治は、町会に高等女学校の設立を諮問した。それに受けた町会は「全会一致其必要ヲ決議」¹⁰し、この事業を大正9年度から12年度にわたる4か年継続の事業とした。その後、町長は神谷高治から岡田菊次郎に替っているが、その方針は受けつがれた。

そして1921（大正10）年2月25日に文部省からの認可を受け¹¹、4月11日に開校式と入学式をおこなった。第1学年73名・第2学年49名が入学し、安城町役場議事堂を仮校舎として開校した。校長には東京府立第二高等女学校教諭の塚原常之

助が就任した。

この学校は、確かに安城町立として設立が計画された。しかし、同時にこの学校はかなりの程度、碧海郡のバック・アップを受け、実現したのもあった。

本郡〔碧海郡—引用者〕当局も亦夙に見る所ありて、大正八年に至り郡会に諮りしも遺憾ながら之が設置を見る事能はざりき。翌九年に至り機漸く熟し、安城町刈谷町に各一校を設置し町立とし郡より之が建設費及経常費の五割を両校に補助するの議を決し、之が予算を郡会に提出し満場一致を以て之が可決を見たり〔以下略〕¹²。

つまり、碧海郡当局は、安城町と同郡内の刈谷町にそれぞれ町立高等女学校を設置させ、建設費・経常費を両校に補助しようとし、それが実現したのであった（なお町立刈谷高等女学校も安城と同時に開校している）。

しかしながら、そういう体制は長く続かなかつた。郡制廃止によって碧海郡自体が廃止されたからである。

そして町立安城高等女学校は、県に移管されることになったのである。しかし、それは大きな問題をともなった。

愛知県会は1922（大正11）年の郡制廃止にともなって13の郡立学校・町立学校を県立に移管する諮問案を出していた。それは、高等女学校でいうと丹羽郡立高等女学校・知多郡立高等女学校・町立刈谷高等女学校等であり、安城高等女学校はそこからはずれていた¹³。ところが県は1922年1月10日、刈谷高等女学校を県立移管の対象からはずし、安城高等女学校と入れ替えたのであった。

これに反発した碧海郡会では2月17日大見茂市（安城町選出）が、「郡立女学校ヲ県ニ移管ノ意見書提出ノ建議」¹⁴を出して、安城高女とともに刈谷高女も県に移管することをもとめた。さらにこの

決定を不当として、刈谷町長・助役と町会議員全員が辞職を表明し、一大問題となったのである¹⁵。

この両校の入れ替えについては、直接的には政友本党と甲子倶楽部が、県会において刈谷高女の移管に反対したため原因とされる。また、それは刈谷町の有力議員で刈谷高等女学校県立移管推進の中心であった大野一造が長年属していた政友会（この場合、政友本党）を離脱して憲政会に入ったことに起因したとされる¹⁶。

いずれにせよ、安城町立安城高等女学校は、1924（大正13）年4月1日をもって県に移管され、愛知県安城高等女学校になり、再出発することになったのであった。

註

- 1) 安城町に関しては、編さん委員会『安城市史』（1971年）参照。
- 2) 安城高等女学校（現在、愛知県立安城高等学校）の校史には、編集委員会『安城高校五十年』（同校、1970年）・編集委員会『創立六十年記念誌』（同高校創立六十周年記念事業実行委員会、1990年）・編集委員会『創立八十周年記念誌』（同高校創立八十周年記念事業実行委員会、2002年）があり、参照した。
- 3) 愛知県の高等女学校については愛知県教育委員会『愛知県教育史』第4巻（同委員会、1975年）、および杉本嘉八「東海地方における女子中等教育の展開について（2）一高等女学校創設期一」（『名古屋女子大学研究紀要』第33号、1986年3月）等参照。
- 4) 「創立の沿革」（『愛知県安城高等女学校概覧』同校、1923年）1頁。
- 5) 安城町行政文書（安城市歴史博物館所蔵）中の学事統計にはこの点についての数字がないが、愛知県碧海郡安城町役場『安城町誌』（同役場、1919年）の「本町出身者教育程度調査

表」によれば、第一から第五までの小学校からの高等女学校進学者は5名とある（103頁）。このデータには意味が不明の部分があるが、少なくとも高等女学校への進学者が「激増」とまではいえないとはいえよう。

- 6) 「議案提出理由書 高等小学校第三学年及女子補習科廃止ノ件」1917年12月28日（『大正十二年四月ヨリ 申請書綴』安城町行政文書）。
- 7) なお、この安城町立実業補習学校については、拙著『大正デモクラシー下の“地域振興” 愛知県碧海郡における非政治的・社会運動的改革構想の展開』（不二出版、1999年）の第四章「地域振興の主体としての農業・農村教育」で論じてある。詳しくは同書を参照されたい。
- 8) 前掲「議案提出理由書 高等小学校第三学年及女子補習科廃止ノ件」。
また前掲『安城町誌』も、女子教育の状況を次のように述べている。
一般の教育日を追ひて普及するに至りしも、尚土地の状況慣習上女子教育を軽視するの風止まず、義務教育の延長せらるゝや困難を訴へ、学齡中製糸女工たらしめんとするもの、家事の手伝いを為さしめんとするものありて、当事者勧誘に努むる所あるも遺憾の点少なからず、併し裁縫に至りては慣習上万事を排し、針師匠に就きて之を修むるもの多し（97頁）。
- 9) 安城町の場合は、あきらかにすることができなかったが、隣村の六ツ美村農業補習学校の場合は、1924（大正13）年度から27（昭和2）年度の学籍簿が残っており、父母の階層をある程度、知ることができる。
この4年間の入学者のうち階層が記載されているのは、37名であるが、その内訳は地主兼自作7名・自作16名・自作兼小作9名・その他3名（非農業者等）である。小作と明

記されているものは0である。サンプル数が多くないので断定はできないが、自作農と地主兼自作に入学者が集中しているという傾向がうかがえる（『学籍簿 自大正十三年度至昭和四年度』六ツ美村役場文書、岡崎市教育委員会所蔵）。

それに対して男子の場合、階層記載者は42名で、自作12名・自作兼小作17名・小作10名・その他3名で、男子の場合、地主兼自作は0である。階層的には、あきらかに女子の方が高く、実業補習学校が中等教育機関の代用的な役割を果たしていたことが、うかがえる。

- 10) 「創立の由来」（安城町立安城高等女学校『TWINKLE 落成式記念号』（同校、1923年）1頁。
- 11) 「文部省指令愛普第二十九号」（『官報』1921年2月25日）
- 12) 前掲「創立の由来」。ただし愛知県碧海郡役所『碧海郡会史』（同役所、1923年）には、郡会の「議事摘要」があるが、この件については見当たらない。
- 13) 前掲『愛知県教育史』第4巻、175頁。
- 14) 前掲『碧海郡会史』319頁。
- 15) 愛知県議会事務局『愛知県議会史』第5巻（愛知県議会、1964年）739頁以下参照。
編さん委員会『刈谷市史』第3巻近代（1993年）522-23頁。なお、この件については、前掲、高木雅史「1920年代における地域社会の女子中等教育機関設立要求―町立刈谷高等女学校の設立と県立移管をめぐって」が分析している。
- 16) 前掲『愛知県議会史』第5巻。

II 安城高等女学校の教員と生徒

1. 安城高等女学校の組織

以上のように安城高等女学校は設立され、さらに県に移管された。

設立当初の安城高等学校は、町役場の議事堂を仮校舎としていたが、1922（大正11）年4月に安城町大字安城字毛賀知（現在安城市桜町）に移転した（後身である現在の県立安城高等学校は、安城市赤松町に移転している）。本科（修業年限4年）と補習科（1年）をおき、定員は1学年あたり本科100名・補習科若干名であった¹。他方、教員は表2のとおりである。

表2 安城高等女学校の教員一覧
(1924年3月現在)

校長兼教諭	塚原常之助	学歴：高等師範学校卒
	本籍：東京府	
教諭	A男	免許科目：教育・博物・理科・農業
	学歴：東京高等師範学校卒	
	本籍：兵庫県	
	B女	免許科目：教育・数学・理科・体操
	学歴：女子高等師範学校卒	
	本籍：東京府	
	C男	免許科目：体操 学歴：検定
	本籍：愛媛県	
	D男	免許科目：英語
	学歴：東京外国学校 本籍：愛知県碧海郡	
	E女	免許科目：裁縫 学歴：検定合格
	本籍：愛媛県	
	F男	免許科目：図画・手工
	学歴：東京美学校卒 本籍：埼玉県	
	G女	免許科目：修身・国語・歴史・地理・漢文・体操 学歴：東京女子高等師範学校
	本籍：福島県	
	H男	学歴：愛知県第一師範学校二部卒
	本籍：愛知県碧海郡	
	I女	学歴：東京府女子師範学校二部卒
	本籍：三重県	
教諭心得	J男	学歴：仙台高等工業学校卒
	本籍：秋田県	
書記兼嘱託教師	K女	本籍：愛知県宝飯郡
嘱託教師	L女	本籍：愛知県岡崎市

註：前掲『愛知県安城高等女学校概覧』

教諭心得や嘱託教師（うち1名は書記兼任）をふくめても13名の教員であり、決して大きな教員組織ではない。

教員の学歴は、検定合格等、正規の学校教育機関を経ない場合や、師範学校二部のように本来中等教員の養成を目的としない学校の出身者もかなりふくまれている。しかしながら、大半は東京高等師範をはじめとする高等教育機関の出身である。その意味では、教員の資質にかなりばらつきはあったが、これは、この高等女学校だけのことでなかったと思われる。

また、その場合、教員の出身校は、愛知県の学校が皆無に近いことも特色である。これは基本的には愛知県に中等学校の教員を養成するための教育機関が存在しないことによるものである²。

また、本籍でいうと愛知県出身者は、13名中4名にとどまるが、その4名はすべて三河、つまり地元の出身である。しかし、残りの9名は、県外の出身である。この、地元出身者がある程度、存在しながらも地元出身者以外が多数をしめるという教員組織のあり方は、おそらくは地方の中等教育機関にある程度共通する傾向であると思われる。初等教育機関＝小学校が比較的狭い範囲の地元出身者中心であったことと、明確な対比を示しているといえよう。このことは、地域との結びつきという側面からいえば、プラスの要因とはいえないかもしれない。しかし、とくに東京の高等教育機関出身者が、かなりの比率をもって存在しているということは、この時点から10数年後に東京外国語学校出身の英語教員、新美正八（新美南吉）³がおこなったように、それまで、価値意識においても等質な地域社会のなかで育ってきた生徒たちに、それまでなじんできた“文化”とは異質の文化を提示し、生徒たちの知的成長へ刺激をあたえるという可能性もあった。

それらの教員が担当するこの学校の教科科目は、表3のとおりであった。

まずは高等女学校としての平均的な科目である。ただし、このあとの時期には農業関係の科目がお

かれることになる。それは、この学校の教育方針と大きくかわり、本稿での論点の一つとなるが、ここでは、それを指摘するにとどめる。

表3 安城高等女学校の設置科目

本科： 修身・国語・英語・歴史・地理・ 数学・理科・図画・家事・裁縫・ 音楽・体操 および第3・第4学年では随意科目として 華道茶儀 補習科： 修身・教育・家事・裁縫 および随意科目として国語・英語・ 数学・理科・音楽・体操

註：前掲『愛知県安城高等女学校概覧』

2. 安城高等女学校の生徒

安城高等女学校の本科の定員は各学年100名であるが、1期生は、2学年からの入学であったこともあり、49名の入学、2期生は79名の入学にとどまっている⁴。あるいは農村部の新設高等女学校の状況を表しているといえるのかもしれない（この点は、またのちに問題化することになる）。それは、ともかくとして、入学してきた生徒はどのような生徒だったのか。

生徒については、学籍簿等が失われており、保護者の職業や階層をふくめた実態をあきらかにすること困難であるが、いつかの数値によって、できるかぎり、その点を考えてみたい。

まず入学者たちの出身地を表4でしめす。

表4 安城高等女学校生徒の出身地（単位：名）

A安城町内（各大字別） 安城52、今12、里9、福釜・古井各8、箕輪6、 篠目3、上条・山崎各2、大岡・別郷・西別所・ 高木・赤松・北山崎各1 B碧海郡 矢作町20、桜井村18、明治村13、依佐美村10、 上郷村7、六ツ美村6、高岡村2、富士松村・ 新川町・棚尾村各1 C碧海郡外 岡崎市11、額田郡・宝飯郡・渥美郡各9、 愛知郡6、豊橋市3、名古屋市・知多郡各2、 幡豆郡・中島郡・東春日井郡・東加茂郡各1 合計242

註：前掲『愛知県安城高等女学校概覧』

この数は、1期生から3期生までの合計であり、1923（大正12）年4月現在の在 student 数である。この時点の在 student は第3学年47名・第2学年97名・第1学年98名の合計242名である。安城の町立というかたちで設立されたにもかかわらず安城町内出身者は108名（44.6割）と、半数を切っている（その点ものちに問題化する）。また安城町以外の碧海郡出身者は、78名（32.0割）である。

まず安城町内であるが、ここでは大字安城が群を抜いて多い。この地域は東海道線安城駅周辺の市街地であり、入学者には、非農家が相当戸数ふくまれていると考えられる。そのほかは、今・里・箕輪・福釜・古井といった町の中心に位置する大字からの出身者が多く、周辺部からの入学者は少ない（理由は不明であるが、中心の大字では赤松からの入学者が少ない）。これらの地域は基本的には農業地帯であり、入学者も農家が中心であると思われる。

碧海郡内では、桜井村・明治村など隣接地域が多い。しかし刈谷高等女学校の通学区域と重なる郡西部、西尾高等女学校と重なる南部からの入学者は少ない⁵。

郡外出身者では岡崎市・額田郡等隣接地域が目立つが、これらは東海道線で通学が可能であるという条件によるものであろう。また渥美郡・豊橋市・名古屋市等も複数で入学している。遠隔地の生徒は寄宿舎に入っている。

ちなみに刈谷高等女学校は、意図的に名古屋市からの入学者を勧誘した結果、1921（大正10）年度から30（昭和5）年度までの入学者1551名のうち271名（17.5割）が名古屋市からの入学者であったという⁶。

表5は、保護者の職業別一覧である。合計242名のうち農業は137名（56.6割）と過半数をしめる。残りは、商業36名（14.9割）が目立つが、各種の製造業27名（11.1割）も多いし、僧侶・

教員・医者等も一定程度いる。なお、刈谷高等女学校の場合、合計1551名のうち農業は474名（30.6割）であり、以下、公務・自由業374名（24.1割）、商業334名（21.5割）、工業222名（14.3割）とつづく⁷。それに比較して安城高等女学校は、一段と農村的性格が強い。

表5 安城高等女学校生徒保護者の職業（単位：名）

農業・畜産業	137
水産業	1
製造業（繊維工業等）	27
土木建設業	3
商業（物品販売業・飲食業・周旋業等）	36
官吏・公吏	8
僧侶等	10
教員等	6
医者等	7
その他	4
合計	242

註：前掲『愛知県安城高等女学校概覧』

聞き取りを参考にしつつ、推測すれば少なくとも安城町内の出身者については、大字安城の商工業者とそのほかの大字の農家というかたちで類型化できるように思われる。

このように農家出身者が過半数をしめており、農村を基盤としていることは、生徒の意識にも反映する。

労働！私は労働を尊いと思ひます。学校に入つてから今日此の頃迄田畑の多き安城に在つては殊に此の感を深くします。都会の人には労働を忘れ、否嫌つて、世の名利の中に走り徒に奢侈虚栄の心を満足せしめやうとして居るものが多い。けれども田舎に生活をして居る人々に斯様な心がありませうか（大沢スミ子）⁸

こうした“労働”（この場合、論旨からいって農業労働）を価値化するような意識は、生徒にある程度共通する意識であろうし、それは、のちに論じるようにこの高等女学校の教育方針にも大きな影響をあたえていくことになる。

他方、非農家も半数近くあり、当然、そうした生徒の意識、また保護者が期待するものは農家出身者と異なっていると思われる。学芸会で、ピアノを演奏するような生徒の存在は⁹、この高等女学校の別な面である。この高等女学校の教育は、この両者の存在に規定されながら、そして矛盾を孕みながら展開していくことになるだろう。

さらに生徒の階層であるが、この点については、前述のように学籍簿がないという状況ではごく少数の断片的な数値から類推するしかない。

筆者が以前、調査した安城町女子青年団第三分団（大字福釜・箕輪・赤松ほか）の1927・8（昭和2・3）年度の幹事には、安城高等女学校の卒業生が7名ふくまれていた¹⁰。そこで、この第三分団の幹事からあきらかになる生徒の出身階層について簡単に触れておきたい。

一部、不明の点もあるが、それらの卒業生の家庭は、ほぼ農家（1名は教員を兼ねている）である。また全員が所有農地1-3町歩層に属しており、とくに1-2町歩層に集中している。父兄は、例外なく区長・副区長や産業組合の幹事等大字の役職をつとめている。町会議員経験者もあり、福釜の1名は教員を兼ねている。それを、この三つの大字全体のなかに位置づけたのが、表6であり、所有土地からいえば、彼女らの家は上層から中の上程度までに位置していることがわかる。ただし、所得自体は、さほど高くない家庭もある。サンプルがきわめて限られているし、農村部のデータであるので、これをもって安城高等女学校全体として一般化することは無理である。それでもこの結果は、ある程度はこの高等女学校の入学者の階層を示すものではあろう。

表6 安城町女子青年団第三分団中の安城高女卒業生の階層

単位：戸・畝

所得 (1928年)	100円未満	100円以上 200円未満	200円以上 300円未満	300円以上	不 明	計
田畑 (1932年)	188 (36.11)	109 (21.0)	104 (20.0)	110 (21.2)	9 (1.7)	520 (100.0)
5反未満 1250 (50.7)						
5反以上 443 (18.0)						
1町未満 543 (22.1)		2	1		3	6
1町以上 136 (5.5)				1		1
2町未満 67 (2.7)						
2町以上 25 (1.0)						
3町未満						
3町以上						
5町未満						
5町以上						
2464 (100.0)		2	1	1	3	7

[註] i) 安城町役場『安城町経済更生計画書』（1933年）、安城町『昭和三年度特別税戸数割納税義務者資力表』（安城町行政文書）、「青年処女幹事氏名報告ノ件」（安城青年団『発翰綴』安城市青少年の家所蔵文書）
ii) 所得欄は大字福釜・赤松・箕輪の合計戸数。所得土地欄は安城町全体。

註

- 1) 前掲『愛知県安城高等女学校概覧』。
- 2) 当時愛知県にあった高等教育機関は、第八高等学校・愛知医学専門学校・名古屋高等工業学校・名古屋高等商業学校で、基本的には中等教員を養成する教育機関ではなかった。
- 3) 新美南吉は、1938（昭和13）年から結核で没する43（昭和18）年までこの学校の教員をつとめ、生徒に大きな影響を与えた。日記・備忘録には、この高等女学校の状況がさまざまのかたちで書き込まれている（『校定 新美南吉全集』第11巻、大日本図書、1981年）。次回以降で問題にしたい。
- 4) 前掲『愛知県安城高等女学校概覧』。
- 5) 1925（大正14）年3月の刈谷高等女学校の本科卒業生の碧海郡出身者の内訳は、刈谷町17名・高浜町12名・知立町11名・富士松村7名・新川町6名・大浜町4名・高岡村4名等である（「刈谷高等女学校卒業式」『碧海郡時報』第148号、1926年3月、38頁）。このうち知立町・富士松村・高岡村は地理的に刈谷に近い。しかし高浜町・新川町・大浜町は、距離的には安城と刈谷は大差がない。三河電鉄によって刈谷へ通学することが容易なためであろう。
- 6) 前掲、高木雅史「1920年代における地域社会の女子中等教育機関設立要求一町立刈谷高等女学校の設立と県立移管をめぐって」12頁。なお原資料は、『愛知県刈谷高等女学校創立拾周年記念』（同校、1931年）。
- 7) 同前、15頁。
- 8) 大沢「労働観」（『時報』第2号、愛知県安城高等女学校校友会、1925年4月）2頁。
- 9) 「学芸会娯楽会の記」（同前）1頁。これは、1925（大正14）年2月13日にひらかれた会についての記事であるが、4年生の二人の生徒が「狩人の歌」（作曲者不詳）をピアノ連弾し、伊藤教諭（前掲の教員一覧にはない）が、「アンブロンプチュ〔即興曲〕」（シューベルトか）を独奏している。なお、高等女学校における西洋音楽の受容については、岡崎市の岡崎市立高等女学校を例にして論じたことがある（「戦前期地方中小都市における西洋音楽受容—愛知県岡崎市の“音楽会”をとおして」『歴史評論』第614号、2001年6月）。
- 10) 前掲、拙著『大正デモクラシー下の“地域振興” 愛知県碧海郡における非政治的・社会運動的改革構想の展開』298頁以下参照。

（以下、次回）